

2つの発見とその後

—ダックスとブローカの場合—

渡 辺 俊 三 佐 藤 時 治 郎 寺 田 光 徳*

弘前大学医学部神経精神医学教室

* 弘前大学人文学部フランス文学教室

南フランス、ラングドックの文化、行政、経済の中心はモンペリエ (Montpellier) である。旧市街は17, 18世紀の家屋が立ち並び、南フランス屈指の美しい町である。¹⁰⁾ この町には1221年に設立されたヨーロッパ最古の医学部を誇るモンペリエ大学がある。高名な文学者ラブレーや大予言者ノストラダムスもこの医学部の出身であるという。同時にこの地は1836年7月の医学会においてはじめて言語機能と左大脳半球の関係について発表がなされたという、神経心理学にとっては記念すべき発表がなされたといわれる土地なのである。ここでの主役は Midi(南フランスの意味でパリからみて田舎という意味合いもこめられている) の地方医、Marc DAX であった。

今日、左右大脳半球の研究は盛況を極め、1981年京都で開催された世界神経学会のシンポジウムの一つも、「左右大脳半球について」であり、この年のノーベル賞生理学部門の授賞者が脳梁損傷者の左右大脳半球についての権威であるスペリー博士であったことも神経心理学にとって記念すべき年であったといえよう。しかしこの学問的盛況も突然出現したのではなく、先人の苦勞の積み重ねがあったことをわれわれは忘れてはならない。

現在、一般に流布されている医学書をみると、言語機能と左半球の関係を最初に記述したのは Paul BROCA (1861) ということになっている。しかし、その *priorité* についての論争が Marc DAX (1770~1837) と Paul BROCA (1824~1880) との間に繰り広げられ、医学会に種々の波紋を引き起こしたのを忘れてはなるまい。

この問題についてはすでに Critchley, 杉下^{4,5)}, 岩田^{13,14,15)} の記述がある。それによると Marc DAX は1836年7月24日のモンペリエの地方会で既に次のような発表をしていたと、1865年4月26日息子の Gustave DAX によって医学雑誌に公表された。その内容は 1) 単語の記憶喪失あるいは忘却があるが、物事の記憶障害がないこと、2) ある単語を言おうとして別の単語を言ったりするが、言語記憶障害の患者の大多数は話すことができる、3) 舌の麻痺や味覚障害はない、4) 左大脳損傷がある、などの指摘である。これからみて DAX の発表は「失語症と左大脳半球損傷」^{6,14)} について言及していたことは明らかであると思われる。

一方、BROCA は1861年に「話し言葉の喪失、大脳の左前葉の慢性軟化と部分的破壊」について論文を発表している。その内容は言語障害の2例 (Leborgne と Lelong) で、Leborgne が有名な Tan 君のものである。そこでは言語機能と左前頭葉^{1,15)} の関係が強調されている。

これら二つの神経心理学の上での画期的な発見が同じフランスの、一方はミジ、一方はパリで同時代に発表されたことは興味深い。ところでその後の二人の動向はどうなったのであろうか。

1865年 BROCA は健康がすぐれず南フランスを旅行していた。南フランスのモンペリエに着くと何冊かの医学雑誌を読んだ。その時、初めて Marc DAX の子息 Gustave DAX が失語症は左大脳半球損傷であるということの *priorité* について異議を申し立てていることを知

ったという。BROCA はさっそくモンペリエの図書館で1836年のすべての雑誌を調べたがその記録は発見できなかった。(その後の調査では第3回医学会が1836年7月1日から10日までの間にモンペリエで開催されたが、論文も議事録も発見されていない。) また当時モンペリエにいた20名の医師に尋ねても、Marc DAX の医学会での発表について誰も知らなかったという。¹³⁾

著者の一人渡辺は1981年日本学術振興会と INSERM (Institut National de la Santé et Recherche Médicale フランス国立保健医学研究所) の日仏科学事業の交流研究者として滞仏し、この地を訪れる機会があったので、その時の印象と1966年6月12日ソンミエール (Sommières)^{16,17)} で催された DAX 没後130年記念式典と、1980年パリで行なわれた BROCA 没後100年記念式典に触れてみたい。¹¹⁾

ソンミエール (図1, 2, 3, 4) はモンペリエの東北27 km に位置する小さな村である。南フランスはニーム, アルル, アビニョンなど古代ローマの影響を受けた景勝地が多いが、このソンミエールは南フランスの田舎町でもとくに小さな、ひっそりと自然の中にくつまっているような存在である。町の通りは狭く、軒下をくぐり抜ける石造りのアーケードは低く、通行人が押しつぶされそうな雰囲気漂わせているのである (INSERM の NAGEL 女史のご配慮でモンペリエ大学神経生理学 BARDY-MOULINIER 教授にご案内をいただいた)。

DAX 没後130年記念式典 (表1) は1966年6月12日モンペリエ大学において主催され、発起人はモンペリエ大学医学部名誉学部長 EUZIERE, フランス医学学会員 ALAJOUANINE, 世界神経学会長 CRITCHLEY, フランス神経学会長 THIÉBAUT の4人であった。記念式典 (Cérémonie en l'Honneur du Docteur Marc DAX (1770~1837) et du Docteur Gustave DAX (1815~1893)) は11時よりまず村役場で式典 (Réception) が行なわれ、アンドレ村長, ウージェール名誉学部長, アラジュアニヌ教授, クリッチレー教授がそれぞれ DAX 父子の業績を称える挨拶, 講演をした。11時45分より DAX の家へ記念標識板 une plaque commémorative (図5) が打ちこまれた。12時にはいつも市で賑わう村最大の広場 la place du Marché に DAX の名が冠され, DAX 広場 Place du Docteur Marc DAX (1770~1837) et Docteur Gustave DAX と命名された。

つぎにこの式典での挨拶について触れる。

ソンミエール村長アンドレ博士の挨拶

英国の尊敬すべき同僚, 諸先輩, 諸先生, 同僚諸兄, 友人各位の皆様方へ

ソンミエールは今日喜びにうき立っております。そして今日ここに私どもが集まりましたのはソンミエールの Marc DAX 医師が1836年以前に失語症の原因を脳の左側に見出し, またそのご息子の Gustave DAX 医師が固い意志と, すばらしい洞察力をもって, ご尊父の著作をこの土地で開業しつつ, 引き継いできたことを顕彰するためであります。

ソンミエール村とその村議会と私自身は, みなさまが正義と名誉回復の気持ちでこの地を訪

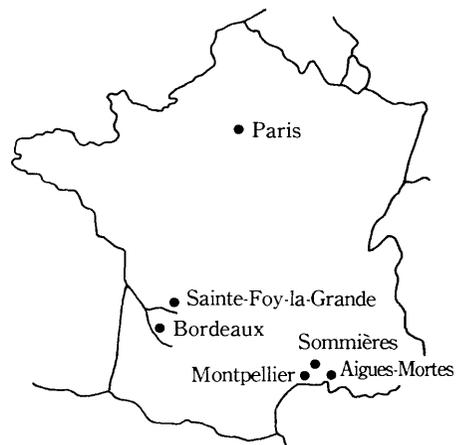


図1 フランス地図

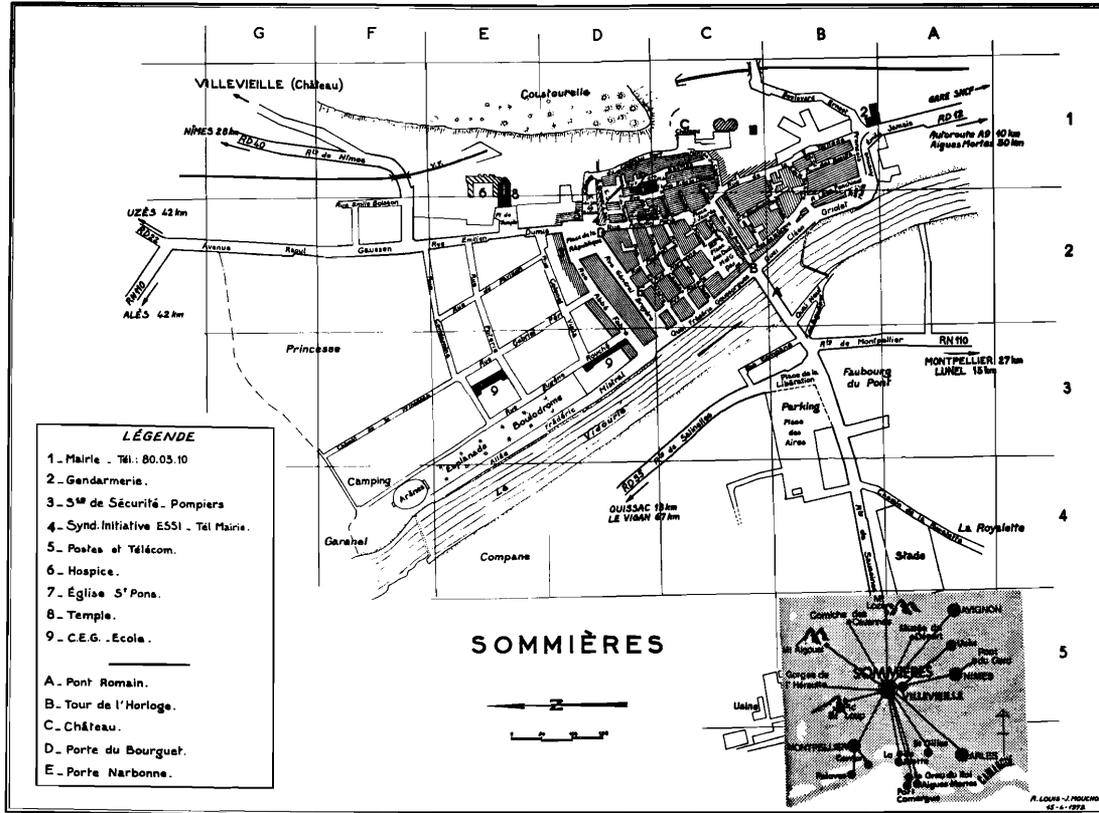


図 2 ソンミエールの地図

A3 RN 110 でモンペリエまで 27 km

C2 DAX 広場

C2, D2. Rue Antonin Paris

右下

ソンミエールから近隣都市の方向 (地図と方向が異なる)

(Cité touristique entre les Cévennes et la mer より)

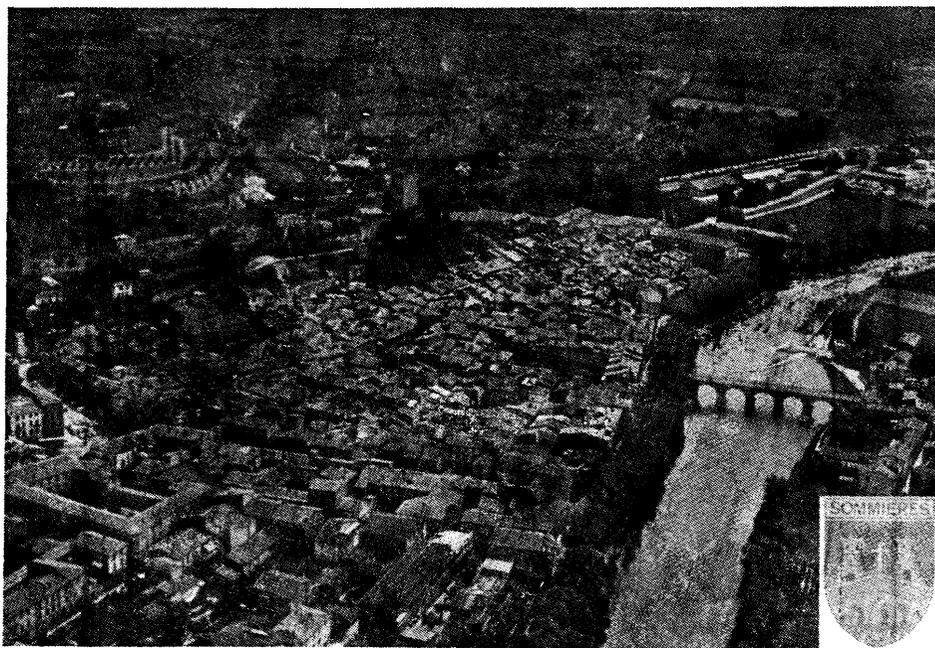


図 3 ソンミエールの航空写真と村章
 ビルドール川にかかるローマ橋を渡ると村役場。
 その後の広場が DAX 広場。
 さらにその左にある通りが Rue Antonin Raris.
 写真右下がソンミエール村章。
 (APA-POUX-ALBI より)

ずれることで、私共にたまわりました多大の榮譽を十分に感じております。これについては心から感謝する次第です。

私共はこの小さな村でのみなさまの束の間のご滞在が、心地良くまたそれが楽しい思い出となられますように希望いたします。そのために私どもは最善を尽くしましょう。

DAX 父子が科学にもたらした寄与については、秀でた方々がこれから私共に語ってくださいます。

私は簡単にこの地方の伝統に従って、われわれの著名な先人がその生涯において、また医師としての行動において示されたことを皆さんにご報告したいのです。

ご尊父 Marc DAX は偉大で力強い方でした。彼の献身は比類無きもので、この地の彼の患者は膨大な数にのぼりました。彼は博学で当時すでに多くの出版物を著し、自分の価値を認識していました。

はじめはエーグ・モルト (Aigues-Mortes) に配属され、そこで結婚し3年間を過ごしました。その地では「Aigues-Mortes の医療地図の報告」を著す時間を得ました。彼の妻は子供のないまま亡くなりました。やがてはモンペリエ大学の教授となられた方の父親である CHRETIEN 医師にソンミエールに呼ばれて、彼は1800年に配属されてから1837年に死亡するまで当地で過ごすことになったのです。彼は再婚し、2人の息子と2人の娘を得ました。1809年に、彼は「13世紀末のエーグ・モルトと地中海のそれぞれの位置に関する研究」を出版しました。

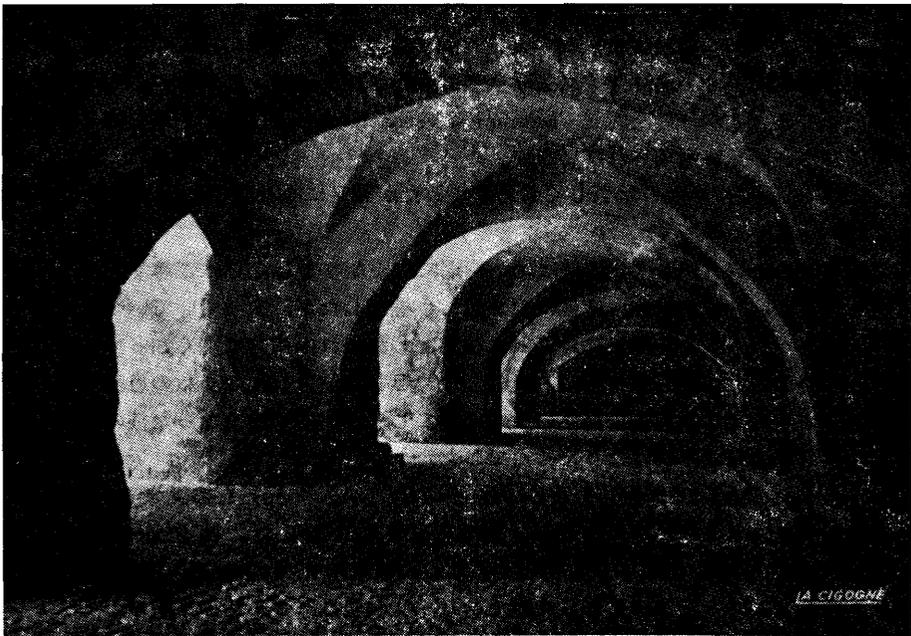


図 4 狭い路地と軒下のアーケード (APA-POUX-ALBI より)

表 1 DAX の 記 念 式 典

CÉRÉMONIE EN L'HONNEUR du Docteur Marc DAX (1770-1837)
et du Docteur Gustave DAX (1815-1893) Médecins de Sommières

Comité d' honneur

Professeur J. EUZIÈRE-Doyen honoraire de la Faculté de Médecine de Montpellier.

Professeur Th. ALAJOUANINE-Membre de l'Académie de Médecine.

Docteur Macdonald DRITCHLEY F. R. C. P.-Président de la Fédération Mondiale de Neurologie.

Professeur F. THIÉBAUT-Président de la Société Française de Neurologie.

Professeur Ch. BENEZECH-Doyen de la Faculté de Médecine de Montpellier.

Professeur P. PASSOUANT-de la Faculté de Médecine de Montpellier.

Professeur Cl. ROMIEU-Président de la Société d'Histoire de la Médecine de Montpellier.

Docteur J. RAVOIRE-Médecin des Hôpitaux de Montpellier.

Docteur R. ANDRÉ-Maire de Sommières.

12 Juin 1966

11 heures —Réception à la Mairie de Sommières—

Allocution du Docteur R. ANDRÉ, maire de Sommières.

Allocution du Doyen J. EUZIÈRE.

Allocution du Professeur Th. ALAJOUANINE.

Allocution du Docteur M. CRITCHLEY.

11 heures 45

Une plaque commémorative est inaugurée en l'honneur du Docteur Marc DAX sur la maison qu'il habita à Sommières.

12 heures

Le nom des Docteurs DAX est donné à la place du Marché de Sommières.

ついで1810年にも論文を出し、1814年には「ソンミエール付近の淡水産および湖水産の貝を専ら集積する一岩石に関する研究」を発表するのです。

以上のことはすべて彼の精神と教養の資質を示すものです。最後に1836年、名高い彼の失語症論がモンペリエの第3回南フランス医学会議で発表されました。これについては後にも語られますが、ウェルギリウスの一詩句“Memini si verba tenerem”（私が約束を守るかどうか心に留めておきなさい）が引用されています。

Marc DAX は態度がかなり堅苦しくもありましたが非常に献身的でした。彼は37年間の開業で多くの財を成したのです。

彼のご子息 Gustave DAX（ご長男は幼い時期に亡くなりました）はご尊父とは全く異なっておりました。深い知性を持ち、才能に恵まれ、小柄でしたが、太っていていつも白いネクタイをつけ、オペラハットをあみだにかぶった彼を、われわれの祖先はよく知っていました。彼は気難しい性格でしたが全く献身的で、この上なく無私無欲でした。多数の患者を持っていたにもかかわらず、晩年は物質的に窮乏のうちに過ごし、1920年頃亡くなった彼の娘さん達は非常に質素な生活を送らなければなりませんでした。

ご子息 Gustave DAX は全生涯を通じご尊父 Marc DAX の発見を擁護するために戦いました。彼は医学アカデミーに論文、記録、書簡を書き送りました。彼は BROCA, TROUSSEAU, Charle RICHEL ちに手紙を書いて抗議し、後者の2人は後にその立場を修正することになりました。彼の人生は絶えざる戦闘であり、父の発見についての不断のデモンストレーションでありました。



図 5 Marc DAX の診療していた建物と記念標識板
(上図は Y. GOUIFFES 氏の好意による)
(下図は文献 3) より)

DAX 父子は研究のすべてをモンペリエで行なっています。

奇しくもこの脳髄に対するすばらしい情熱をもった家族の中で、末裔のご息が新婚旅行中に脳出血で死亡しております。

以上、前世紀にこの小さな村の医師であった DAX 父子のおおまかな輪郭をご紹介申し上げます。

本日は諸氏のお蔭でこの父子に栄光の瞬間が訪れたのです。

私どもは諸氏に深い感謝の念をお献げいたします。

モンペリエ大学医学部名誉学部長ウージェール教授の講演

村長殿および諸氏

われわれがここに集まりましたのは、Marc DAX の名声をほめたたえるためです。しかし彼はこの地に生まれたものではありません。

このことは、それだけで注意がはられるのにふさわしいことです。1770年にタラスコン・シュル・アリエジュ (Tarascon-sur-Ariège) に生まれた Marc DAX 医師は、共和国暦第9年にソンミエールを人間的な心情から選び取って、この地で37年間の慈愛に満ちた開業生活を送りました。そのために今日ではソンミエールの DAX と語られるのです。(中略)

DAX 父子の慈愛と学究を記念することほど心がなごむ模範的なことが他にあるでしょうか。DAX 父子と申しましたが、その理由は、この父子に同一の賢讃を捧げないのは間違っていると思うからです。

ソンミエールの村役場と村長アンドレ博士が本日の式典に我々をお招きくださるのは、寛大で力づけられるお考えでした。関係の皆様深く感謝申し上げます。呼びかけに答えた人達がいかに多数であろうとも、この聖地への旅に彼らを導いたのが同一の動機であると、認めるのは正しくありません。

列席者の中では先ず、ソンミエールの住民諸氏が見受けられます。彼らを導いているのは感謝の気持ちです。言い伝えから彼らは DAX 父子、この村のあの二人の偉大な恩人に、負うものすべてを知っているのです。

共和国暦第9年の悲しい日々には、ソンミエールの病院にはもう医師がおりませんでした。Marc DAX 博士はわが身をもってその人材不足を解消してくれたのでした。彼はエーグ・モルトを離れ、ソンミエールに住みついたのでした。彼はその死に至るまで第二の故郷の同胞住民の奉仕に献身したのです。

彼のご息は医学博士の称号を取得するとすぐに父とその職務を交替し、1898年の死に至るまで慈愛溢れる任務を続けました。

このお二人の恩人は村の人々の深い感謝の念を受けるにまさに値するものです。

しかし、村長、貴下の呼びかけは地域の枠を越えてしまいました。彼は別の種類の讃嘆者達の心を動かしたのです。その人々は言語中枢の発見を Marc DAX のものとみなしているのです。この発見により、彼は大脳病理学の秘密に分け入る道を切り開いたのです。今、こうして、ソンミエールにおいて多くの国々からの学者の源泉を探る聖地詣りが行なわれているのです。彼らの列席は、名誉回復に値し、正義の行動と真実への敬意という意味を帯びているのです。

私はフランス神経学派の長であるアラジュアニヌ教授のご臨席に感謝を込めて敬意を表したく思います。生涯に渡って、彼は多大な問題に関心を持ってこられました。しかしおそらく、彼が最も情熱を注いで追求されたのは失語症の研究でありましょう。彼はサルベトリエール病

院のもたらず豊富で無限の臨床例を調査することに努めたばかりでなく、過去の全ての失語症者を患者に選んだのでした。研究、調査、古文書の解説の結果、彼は死後の打ち明け話を聞き取ったのです。こうして彼は、あのモンペリエの学者で、BARTHEZ の後継者、一世紀も前に死んだ LORDAT の失語症に関する来歴を書くに至りました。

同様の感動でもって私はマクドナルド・クリッチレー教授の前に頭を下げます。同氏はイギリスの神経学を代表する最も卓越した人物であり現在の世界神経学会の会長でもあります。彼も言語障害に特に傾注して取り組まれました。彼にとって大脳病理には何等の秘密はなく、真のヒューマニストとして知識の限界を押しやるのができたのです。彼は人間的であるものには何であれ関心を持っています。失語症の問題に関してもその歴史のことも問題を無視することができませんでした。かくして彼は Marc DAX 医師の性格に関心を持つに至ったのです。1964年、神経学のイギリスおよびフランスの合同学会で、彼は DAX-BROCA の論争を学会の開会講演に選びました。

パリ大学医学部で行なわれたこの講演は、ソンミエール村の周囲に多数の著名な神経学者を集める今日の式典の源となりました。

(以下略)

フランス医学アカデミー アラジュアニヌ教授の講演

村長殿およびご来参の諸氏へ

二年前の今と同じ月の6月にフランス神経学会 (Société française de Neurologie) は、パリで王立医学会 (Royal Society of Medicine) 神経部会の医学者をお迎えいたしました。この合同学会では多数の発表がありましたが、イギリスの神経学者の中で最も卓越した学者の一人であるマクドナルド・クリッチレー教授は DAX-BROCA の論争に関して十分に資料に裏付けされた講演を行ないました。その終りの部分で次のような言葉が聞かれました。「……、今日では、二人の DAX 医師の貢献はもう医学会から忘れられることはない。しかし、今でもソンミエールの静かな村は、自分達の村に住んでいた優れた二人の医師についてほとんど知ることがない。ブルゲ (Bourguet) 広場に立つ彼らの家の壁にはどんな記念標識板もなく、その村に様々な事柄に因んだ名を持つ通りは数あるけれども、旅行者が二人の DAX に因んだ通りを捜そうとしても無駄である。

この結びの文句が混乱で一杯にしたのはフランス人の聴衆、そしてさらに、いうまでもないことですがその栄光の一つを一種の動脈硬化、もっと悪いことには剝離斑 (記念標識板とかけている) のない動脈硬化とでも言えるようなものに至らせてしまったラングドック地方の名誉、という点で狙い打ちされたセプティマニーの人々でした。このような刺激を受けて、彼らはパスアーン (PASSOUANT) 教授の積極的な後押しのもとに、受けて立とうと努めるのをやめませんでした。ソンミエールの当局では彼らの長である、勤勉な村長アンドレ博士と共に、すぐに、著名な子孫二人の DAX 医師に対する村の明らかな無関心をぜひとも改めようとなりました。これは我々には本日の記念式典の大きな喜びとなるものです。

一世紀前の1865年に、数多くの討論会が DAX についての LEBAT のささいな報告の討議のために催されたフランス国立医学アカデミーの代表として、私は大脳半球機能研究史のなかで最も重要なもののひとつを記念するこの式典に参加することができて実に幸福です。ここでいう大脳半球機能研究史とは、「言語活動を司るのが左大脳半球である」ということです。

ところで、親愛なるクリッチレー氏、あなたの2年前の結論はもはや有効ではありません。というのは、われわれの世界ではすべてがすばやく変化するのです。けれどもあなたの気に召す

ことにしかならないこの変化について、繰り返して言いますが、この変化をあなたが初めて教えたのです。われわれの全員があなたに感謝申し上げるものです。

国際神経学会会長クリッチレー教授の講演

村長および諸氏

今日お招きを受けたのを大変名誉なことに考えております。この美しい町に、私は Marc DAX とそのご子息の二人の著明な地方医師に敬意を捧げるために招かれたのです。

私は失語症の研究者としてそして長期に渡って医学史に興味を持ってきました。数年の間、言語能力に結びついた脳の局在に関する発見の魅力的な物語に重大な関心を抱いてまいりました。1861年に BROCA がどのようにして言葉の喪失と前頭葉損傷との関連に初めて注意をひかれたかを——それは恐らく AUBURTIN に刺激されたとのことですが——思い出してみましょう。実際には BROCA はもう一人の秀れた医師で解剖学者でもある、パリで働いていた GALL という人に、およそ50年かそれ以上も前に先を越されていました。しかし、脳の両半球が同等の潜在力を持つてはいず、片方はもう一方より勝ったり劣ったりする機能を有していることを医師や解剖学者が明らかにしてから、わずか一世紀が経過しただけです。こうして、1861年に、そしてそれに続く数年間、BROCA はパリで、前頭葉の疾患には、とくに表現能力の消失を伴うことを明らかにしました。しかし彼は、脳の右半球の傷害と左半球の傷害との間にはいかなる区別もつけませんでした。1864年の終わり頃、彼は、失語症患者の死後の死体解剖の結果、脳の大部分に傷害が見られたけれども、それは両半球に亘るものではなく、ただ左半球だけに傷害があることを確かめました。この観察報告は公式に発表されましたが、Gustave DAX の憤慨した抗議を引き起こしました。Gustave DAX は、1800年初頭に彼の父である Marc DAX が、脳の左半球の重要性をすでに明らかにしていたこと、そしてこのことを1836年7月のモンペリエ南フランス医学会で発表していたことを指摘しました。残念なことに、ともかくも、この論文は全く印刷されなかった模様であり、したがって BROCA がこの事実に通じてなかったのは仕方がなかったと思われます。Gustave DAX はそれでも無視されることを望まず、1836年に父によって書かれた自筆原稿を探し出して出版し、Gustave 自身の注釈を付けて1865年4月26日 Gazette hebdomadaire de Médecine et de Chirurgie に再版させました。

こうした事情で、私の友人である Ferguson 医師と私自身は、6年前にプロヴァンス地方のニームからモンペリエへ行く途中で用を足し、ソンミエールを訪れるために、車でちょっとした廻り道をするに於いて、そこでこの二人の著明な医師に捧げられた記念の建造物を探したのです。だがそこには何もありませんでした。けれども私達は父君 Marc DAX が36年間働いていた病院を幸い発見しました。彼はその地に埋葬されていました。私達はそうしたいと思ったのですが、あなた方の町に逗留することは不可能でした。私達がこの時村長に送った手紙には丁寧な返事が与えられました。それは一つの参考資料であり、DAX 父子の上にくらかの光明を投げかけるものでした。けれども3年前、偶然が私達をこの地に再び訪れさせ、Ferguson 医師と私はもう一度、あなたがたの美しい村に聖地詣でをいたしました。村役場の資料部、郵便局、商店、またとくにカフェで調査を済ませた後、私達はとうとう二人の医師が住んでいた通りを発見したのです。しかし、二人の DAX 父子の思い出のための記念標識板、記念館、彼らの名を冠した通りを見つけることはできませんでした。2年前の神経学会で、BROCA-DAX 論争史についてささやかな講演をした時、この手ばかりを正す作業にわずかながら関与できたことに私は誇りをもっております。

表 2 BROCA の記念式典

COMMEMORATION DU CENTENAIRE DE PAUL BROCA (1824-1880)

Sous la Présidence de
Monsieur Pierre Aigrain
Secrétaire d'Etat auprès du Premier Ministre, Chargé de la Recherche.

Jeudi 19 juin 1980
Hôpital de la Salpêtrière, Amphithéâtre Charcot.

Président d'Honneur : Th. Alajouanine
Comité d'Organisation : P. Castaigne, H. Hécaen, F. Lhermitte, Ph. Monod-Broca, F. Rohmer.
Secrétaires : J. Cambier, F. Michel, J. L. Signoret.

9h30-10h	P. Castaigne (Paris). La vie de P. Broca.
10h-10h30	F. Lhermitte, J. L. Signoret, R. Abelanet (Paris). La découverte de Broca.
10h30-11h	N. Geschwind (Boston). L'aphasie de Broca : le phénix neurologique.
11h-11h30	A. R. Lecours (Montréal). Les corrélations anatomocliniques de l'aphasie : la "zone du langage".
11h30-12h	A. Galaburda (Boston). Cytoarchitecture des aires du langage.
12h30	Lunch
14h30-15h	Mme B. Ducarne (Paris). L'avenir des aphasiques.
15h-15h30	H. Hécaen (Paris). Langage et dominance cérébrale.
15h30-16h	O. Marin (Portland). Neurophysiologie du langage.
16h-16h30	J. L. Nespoulous (Toulouse). Linguistique et aphasie.
16h30-17h	X. Séron (Louvain). Problèmes posés par la rééducation des aphasiques.

この暗示は聞き届けられ、パスアーン教授は行動に移りました。それ故に多大の喜びをもって、私は今日ここに列席し、卓越した Marx DAX 医師と彼のご息子が住んでおられた住居で彼に対する義務を果たすという名誉を得たのです。

言葉の混乱の原因として左半球の果たす役割が重要であることを発見した人物として世界に認められているのにもかかわらず、DAX が地方では余り知られていないのは不思議に思われます。おそらくこの無関心には、息子の DAX の性格になんらかの原因があると考えられます。彼は政治的に反保守主義者であり、当時の村長と反目していました。外国の概論で「DAX の法則」が自由に引用されているのに、ソンミエールの正史には、Dr. Marc DAX の名も、Dr. Gustave DAX の名も記載されていません。当時の市民生活に貢献した後、一年経って Marc DAX は1837年に亡くなり、Gustave DAX が地方病院での父の仕事を引き継いだ後、23年間の奉職の後、彼はまことに奇異にも辞職を勧告されています。その理由は不明であります。Gustave DAX は1898年に83歳で死亡しています。大変惜しまれることですがその息子の Paul は同じ経歴を選びませんでした。彼は医学生として出発していたにもかかわらず、最終試験に合格することなしに年月は過ぎ去ったのです。彼はむしろ文学の方に情熱を燃やし、詩人になって戯曲をいくつか表わしていくらかの名声を得ました。残念ながら彼は不幸な境遇の中で亡くなりました。

市長貴下、多大の誇りの気持ちと喜びをもって、私は、Marc DAX 医師を記念する彼の家の窓枠上の記念標識板除幕式典に参加するようご親切なご招待をいただき、これをお受けいたしました。私はこの列席を医学史に興味をもつ個人としてだけでなく、またとくに世界神経学会会長として果たす所存です。

以上が DAX の記念式典に関することであるが、つぎに Paul BROCA 没後100年記念式典¹¹⁾ (表2) に触れてみたい。1980年6月19日(木)パリ神経学のメッカ、サルペトリエール病院のシャルコー講堂で華やかに催された。フランス政府の後援で ALAJUANINE 教授を名誉会長とし、発起人はサルペトリエール病院 CASTAIGNE 教授, LHERMITTE 教授, サンタンヌ病院 HÉCAEN 教授 (Neuropsychologie 編集主幹), BROCA の関係者として MONOD-BROCA が名をつらね、事務局には CAMBIER, MICHEL, SIGNORET の名がみられる。

記念式典の講演者としてはフランス国内はもとより Geschwind (Boston), LECOURS (Montréal), Galaburda (Boston) も紹介され、この記録はフランスで最も古い歴史をもち、最も権威のある神経学雑誌 Revue Neurologique に記載されている。

記念講演は²⁾ 風食をはさんで10の講演が行なわれたが、その中のカステーニュ教授の「BROCA の生涯」の報告から一部抜粋してみたい。

Paul BROCA は1824年6月29日南フランス、ポルドー近くの Sainte-Foy-la-Grande (図1) に生まれた。父は医師で、母方祖父はポルドー市長であった。Paul は理工科系に興味をいだいていたが、父の影響で医学の道を歩むことになる。

彼はパリで医学を学び、1844年インターン、1846年助手、1853年教授資格者、1867年病理学教授、1868年臨床外科学教授となっている。その間、人類学、外科学、神経学の分野で比類なき業績をあげ、晩年は終身元老院 (Sénateur inamovible) の席を与えられている。1880年元老院で左胸部に強い疼痛を覚え、夜更け執筆中に息をひきとっている。死因は冠動脈血栓症で脳は無傷であった。彼の脳は現在パリ人類博物館に保存されている。彼は国葬によりモンパルナス墓地に葬られ、後、夫人もその傍に埋葬された。

家族的には1857年結婚し、2人の息子の1人はパリ大学医学部教授、もう1人は父の夢であった理工科学校 (Ecole polytechnique) に入学している。曾孫のひとりとは外科医としてパリ大学教授となっている。

性格的には、少し気難かしい所があり、攻撃的で、要求が多い所もあったが、全体的には保守的であった。

彼をとり囲む友人としては、BROUSSAIS, TROUSSEAU, CLAUDE BERNARD, BROWN-SEQUARD, CHARCOT, VULPAIN, PIERRE-MARIE などの俊秀に恵まれている。

以上、DAX と BROCA の発表内容、活躍した場所、さらにその生涯をそれぞれの記念式典を通して概観してきたがその対照性がうきぼりにされる。

フランスというより世界の文化の中心であるパリ、^{12,16,17)} 一方はミジのしかもその中でもとりわけ小さな片田舎のソンミエール、その地位もパリ大学教授、元老院議員であり、一方は終生田舎医師として地方に貢献している。その発表方法においても、正式の専門雑誌に何ら異議をさしはさまれることなく発表しているのに、一方は医学会で発表したらしいということで、現在のところ確固たる証拠が残っていない。また、子息の反論も前者の正式発表に遅れをとっている。また、二つの記念式典の内容においても、その記録においても大きな差がみられる。

ほぼ同一の二つの画期的発見が、歴史の流れにおいて、かくも対照的経過を辿った事実をかいま見て、人の運命のみならず、学問の評価においてもある種の運命というものを感じざるを得ない。

謝 辞

INSERM 事務局員 J. B. NAGEL 夫人のお世話, モンペリエでの BARDY-MOULINIER 教授, ソンミエールでの Y. GOUIFFES 氏の案内に感謝します。

文 献

- 1) Broca, P. : Perte de la parole, ramollissement chronique et destruction partielle du lobe antérieur gauche du cerveau. Bull. Soc. Anthropol., 1^{re} série, 2 : 235-238, 1861.
- 2) Castaigne, P. : Paul BROCA. Rev. Neurol., 136, 10 : 559-562, 1980.
- 3) Cérémonie en l'honneur du Docteur Marc DAX (1770-1837) et du Docteur Gustave DAX (1815-1893). Médecins de Sommières, La Charité Montpellier, 1966.
- 4) Critchley, M. : Dax's law. Inter. J. Neurol., 4 : 199-206, 1964.
- 5) Critchley, M. : Aphasiology and other aspects of language, Anord, 1970.
- 6) Dax, M. : Lésions de la moitié gauche de l'encéphale coïncidant avec l'oubli des signes de la pensée. Gaz. Hebdomaire Méd. Chir. (Paris), 2 : 259-262, 1865.
- 7) 岩田 誠 : 失語症巡礼—その1—ポール・ブローカとパリ. 神経進歩, 19 : 188-191, 1975.
- 8) 岩田 誠 : 失語症巡礼—その2—ダクス父子とソンミエール. 神経進歩, 19 : 396-399, 1975.
- 9) Joynt, R. J. and Benton, A. L. : The memoir of Marc Dax on aphasia. Neurology, 14 : 851-854, 1964.
- 10) 日本航空監修 : バリとフランス, 実業之日本社, 東京, 1972.
- 11) Revue Neurologique. 136 : 10, 1980.
- 12) Seidler, E. : Medizinhistorische Reisen. Band 1 : Paris, Schattauer, Stuttgart, 1971. (大塚恭男訳 : 医学史の旅<パリ>, 医歯薬出版, 東京, 1972)
- 13) 杉下守弘, 豊倉康夫 : 失語症は左大脳半球に損傷がある—その発見はいかにしてなされたか. 科学, 44 : 352-364, 1974.
- 14) 杉下守弘 : Marc Dax. 精神医学, 21 : 431-436, 1979.
- 15) 杉下守弘 : Paul Broca 精神医学, 226 : 655-663, 1980.
- 16) 渡辺俊三 : 「フランス神経心理学懇話会」印象記. 精神医学, 23 : 1290-1291, 1981.
- 17) 渡辺俊三 : フランス神経心理学瞥見記, 精神医学, 24 : 87-91, 1982.